

「ならなぎ よりみちクラブ」活動報告

報告者： 玉尾 ひとみ

日時	2024 年 4 月 11 日 (木) 10 時 15 分 ～ 14 時	天候	快晴	コース名： 第 46 回よりみちクラブ
案内団体 又は催事 名	飛鳥宮跡を巡る			人数 大人：18 名

集 合：近鉄橿原神宮前駅東口 10 時 15 分

ガイド：ならなぎ会員 山下さん

行 程：橿原神宮前東口 10:36 発 → 10:45 バス停飛鳥 → 水落遺跡 → 石神遺跡 →
飛鳥東垣内遺跡(狂心渠跡) → (飛鳥坐神社) → 飛鳥寺(昼食) → 亀形石造物 → 酒船石 →
飛鳥宮跡 → 飛鳥京跡苑池 → 川原寺跡(解散) →
バス停川原 14:03 発 飛鳥駅行/14:07 発 橿原神宮前東口行

出席者…山下(ガイド)・玉尾洋・堀内け・樋口・義田・上森・樋野・嶋田・服部(午前のみ)・竹山
武田・玉尾ひ・辻・山岡・山口・村上・奥山・北川 計 18 名…順不同・敬称略

飛鳥と明日香

万葉集には「飛鳥明日香」とぶとりあすかの記載があり、飛鳥は明日香の枕詞。奈良時代はいり、名前は二文字で表記することが好まれ、「飛鳥」と変わっていった。現在は「明日香村」。昭和 31 年の三村合併の際、古称「明日香」を採用したことによる。

飛鳥水落遺跡(あすかみずおちいせき)

斉明天皇の皇子である中大兄皇子が造ったとされる日本初の漏刻(水時計)の建物跡と想定される遺跡。出土品から 650 年～660 年代の造営だったと考えられている。当時、時を支配することは、社会を統制・管理する上で強い政治性を持っていた。発掘調査から自然石を積み上げた正方形の基壇のほか、暗渠、銅管などが見つかった。基壇の上には楼閣が建てられていたようで、基壇に内部から上部へ水をくみ上げる装置があったこと、それが中国の漏刻の受水槽と同様の木箱の痕跡があったことなどが判っている。また、使われた水は、すぐ西を流れる飛鳥川から引いていたと考えられている。

石神遺跡(いしがみいせき)

水落遺跡の北側に建てられた南北 180m、東西 130m の敷地を有する迎賓館の跡。噴水機能をもつ須弥山石や石人像といった石造物が、この遺跡の一角から掘り出されている。斉明女帝の時代には、東北に住む蝦夷や南九州に住む隼人、また外国使節を迎え、饗応するためにつくられたと考えられ、女帝が目指した国づくりや都づくりの象徴でもあった。持統朝では武器庫があったとの説もある。

飛鳥東垣内遺跡(あすかひがしがいいいせき)

発掘調査で7世紀中頃の南北溝が見つかった。幅約 10 メートル、深さ約 1.3 メートルで、溝としては飛鳥地域で最大規模。物資輸送の運河とみられている。この大溝は規模や時期、位置から、日本書紀の斉明天皇2年条にある「狂心渠(たぶれごろのみぞ)」の一部の可能性が指摘されている。

宮殿の東山に石垣を築くために大量の石材を運ぶ必要があり、のべ3万人を動員して運河を建設したという。後に人々は「狂心の渠」(たぶれごろのみぞ)と呼んで非難した。またこの運河を利用して、200艘の船で石上山(天理市石上神宮付近)の石を、飛鳥の宮の東の山に運んで石垣を造らせた。この石垣の造営には、のべ7万人が動員されたと日本書紀に記されている。

飛鳥寺

6 世紀末から 7 世紀初めに蘇我馬子の発願で建てられた日本最古の本格的仏教寺院。

平城遷都後、飛鳥に残った当寺院は「本元興寺」と呼ばれたが焼失、江戸時代、「安居院」あんどいんと号する

小さなお堂がたてられるまでは荒廃しきっていた。しかし推古天皇発願、止利仏師作の本尊飛鳥大仏は残り、補修されて創建当時と同じ位置に、同じ石造台座の上に今も安置されている。
お顔と右手の一部はオリジナルの可能性が高いという。

酒船石

長さ 5.3m、幅 2.27m、厚さ 1m の石の平坦な上面に奇妙な溝が彫られている。昔、酒の醸造に使用されたという言い伝えから酒船石と言われるがいろいろな説がある。水を流して占いを行ったのでは？という説が有力。この石はもっと大きかったが、近世にはいつて高取城を築城する際に大きく割って搬出されたのではないかとの言い伝えがある。

酒船石遺跡の象形石造物

齊明天皇の時代に造られたとされる、長さ 2.3 メートル、幅約 2 メートルのユーモラスな亀の姿の石造物が平成 12 年に発見された。その南側には、この亀の頭部に水を供給する船形の貯水槽と砂岩切石を積み上げた湧水施設が設けられ、亀形石造物へ水が流れる構造になっている。近年の発掘調査によって、酒船石のある丘陵は、裾部に花崗岩を据え、頂部に天理市の石上付近で産出する砂岩の切石を積み上げた「石垣」で取り囲まれていたことが明らかとなってきた。丘陵全体及び亀形石造物のある谷部を含む一帯は酒船石遺跡と命名された。これらの事柄は『日本書紀』にある「宮の東の山に石を累ねて垣とする」「石の山丘を作る」、石を「石上山」から運んだとする、などの記述をあらわしていると思われる。

飛鳥宮跡

発掘調査の結果、その遺構の変遷は、大きく三時期に分類される。飛鳥岡本宮(舒明天皇)、飛鳥板蓋宮(皇極天皇 乙巳の変の舞台)、後飛鳥岡本宮(齊明天皇)・飛鳥浄御原宮(天武・持統天皇)であったことから、平成 28 年に、名称が「伝飛鳥板蓋宮跡」から「飛鳥宮跡」に改められた。現在復元されている石敷広場や大井戸跡は上層の飛鳥浄御原宮のもの。この時代に、宮の東南に大極殿を中心とする「エビノコ郭」と呼ぶ区画が付加された。エビノコとは、この地域の小字。

飛鳥京跡苑池

庭園文化の日本における始まりを示す苑池。
南池と北池のふたつの池からなり、中堤によってふたつの池が隔てられている。
北東の辺には石組みの湧水施設があり、北辺の水路から飛鳥川への水を流す仕組みとなっている。
南池には、池内に中ノ島があり、高床式の「水上舞台」もあり、儀式や饗宴に使用されたとみられる。
調査は終了していて、今後の復元や公開に向け、整備が進められている。

川原寺

広大な敷地に一塔二金堂式(川原寺式とも称される非常に珍しい)伽藍を持つ飛鳥時代に建立されたお寺。
天武天皇の時代は国の行事に重宝されたのに、なぜかその後歴史の舞台から姿を消してしまう。
齊明天皇の皇子である天智天皇、もしくは天武天皇が母帝のために建てた寺ではないか？と考えられている
そもそもこの地は齊明天皇の仮宮「川原宮」のあった場所。その上に川原寺は建てられた。
現在は、中金堂の礎石と塔跡が残るのみ。中金堂跡地に弘法大師ゆかりの寺、弘福寺(ぐふくじ)として、川原寺の法灯を繋いでいる。

【所感・雑感・反省点、申し送り事項など】

温かい行楽日和にも恵まれ、菜の花、蓮華、瑞々しい新緑と桜吹雪、水彩画のような背景に包まれながらの歴史散策、とても贅沢な1日だった。飛鳥めぐりは何度来ても新しい発見があり、古代が見えてくるように思えてワクワクする。漏刻(水時計)の仕組みをもっと知りたいと思った。
飛鳥資料館に詳しい展示と説明があるそうだ。今回は、齊明天皇の国造りへの夢と野望の跡をたどる歴史散策だった。この女帝は中継ぎの役目から大きく飛躍し、東アジアの一等国になろうとしていたようだ。
血なまぐさい乙巳の変の現場に居合わせたり、要請があったとはいえ、白村江の戦いの戦地に赴き、陣頭指揮をとろうとしていたというのだから逞しい。日本史上最初に重祚と生前譲位を実行した天皇でもある。
興味をかきたてられるスーパーレディである。
今回も興味深い内容で、楽しませてくださった山下さんに感謝、感謝です。